

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 178 回 サンタムールからの贈り物

2006.12.3

わが街・熊谷（埼玉県）に雀幸園<sup>じゃっこうえん</sup>という社会福祉法人がある。ここはいわゆる児童養護施設で、2歳から高校生まで約90名の子供達が寝起きを共に生活している。ここの子供達は身体的には全く健常者であり、雀幸園から各学校に通っている。成績優秀な子供がいたり、スポーツクラブで活躍している子供もいる。

そして、基本的には親御さんがいる子供達である。何らかの理由で親と一緒に暮らすことのできない子供達、児童相談所から紹介される子供達、彼らの背景には、大変複雑な社会問題を背負ったまま、この施設で集団生活をしているのである。

この施設で年に一度、一ヶ月早いクリスマスパーティが開催される。市内で一流のフレンチレストラン「サンタムール」の細井聡彦<sup>ほそいとしひこ</sup>シェフを中心に、全スタッフ、OBスタッフを総動員したケータリング（出張料理）、約130人分の完全無料奉仕のパーティである。「ベル・ショコラ」（地元有志のミュージックベルのグループ）も駆けつけ、今年も楽しいクリスマスが開催された。もう、今年で6回目である。

何年か前の光景である。ちょうど幼稚園ぐらいの男の子、口いっぱいスパゲッティを涙を流しながら、黙々と食べている。「僕、どうしたの、大丈夫？」周囲の心配をよそに、泣きながらひたすら食べ続けていた。こんな美味しい食べ物を食べたのは、生まれて初めてだった。もう、お腹はいっぱい、苦しくて仕方がないのに、嬉しくって嬉しくって、がむしゃらに食べ続けていたのである。「僕、お腹壊<sup>こわ</sup>っちゃうから、また、後で食べようね」4歳ぐらいの女の子、この施設へ来るまで笑うことを知らなかった。人を見るとやたら怯<sup>おび</sup>え、まともな会話ができなかった。可愛い彼女の顔には、小さな傷が無数にあった。「つい一ヶ月前に、ここに来たのですよ」たぶん、自分を産んでくれた親から、むごい虐待を受け続けていたに違いない。

高校生の男の子、「今日は楽しめた？」

「はい、とても美味しかったです。それに、僕の後輩達があんなに喜んでいてのを見て、とっても嬉しかったです。僕も将来は細井さんみたいな、立派なシェフになりたいと思いました。ありがとうございました」

帰り際、新木弘子理事長先生から、ぼろっと漏れ聞こえた言葉が気になった。パーティの準備をしている時だった。ご近所のある人が言っていた。

「税金を貰<sup>もら</sup>っているくせに、きらきらした電飾をつけ、何がクリスマスだ！税金泥棒なんだから、少しはわきまえたらどうだ！！」

先生、気にしたらいいかん。サンタムールやベル・ショコラの皆さんの善意は、そんなもんで薄れる筈がない。「まっすぐ、子供達の顔だけを見て、来年はもっともっと盛大にやりましょう！」きっと、細井シェフはそう言うに違いない。感謝、そしてまた感謝である。